

## フタシが私であるために／高橋礼さん

フタシとはいったいなんなのか

アイデンティティの探索とは、人生最大のテーマであり大いなる旅であるろう。特に国際社会におけるアイデンティティの確立は、日本社会が成長を続けていく上で欠かせない条件となっていくはずだ。けれど、単一民族国家である日本に腰を据え、何の疑いもなくただ安穩とした日々を重ねるだけならば、自己の内的意識の広がり、極めて浅く幼いものに留まるだろう。それはいわゆる平和ボケといったような皮肉めいたものではなく、あくまで日本の文化と歴史が築き上げた閉鎖的な環境に起因する、無意識の産物に違いない。

私は高校2年の1年間、ニュージーランドのハミルトンという街にホームステイをし、インターナショナルの多く所属する現地校に通っていた。校内にはイギリス系白人である俗称キウイと、肌の黒い先住民のマオリ族をはじめ、中国や韓国を筆頭にタイ・インド・カンボジアなど東南アジア地域出身者を含む大量のアジア人留学生、アフリカのソマリアやイラクから戦火を逃れてやってきた難民、またヨーロッパ人やブラジル人など、本当に様々な人種が世界各国から集まり、同じ机に向かい、同じ時間を共有していた。

学校では個人個人の留学生はとても良好な関係を築いていて、人種の違いに関わらずみな仲良しだった。子供らしい友情は文化的な壁をものもしないように見えるし、留学当初の私はこの環境が世界の理想的な縮図だと信じて疑わなかった。そう、これは罪のない無知だった。人種差別の有無を個人単位で見ようとすることがとんでもない間違いであると私が知ったのは、留学後1ヶ月を過ぎて盛んに街に繰り出すようになってからである。

ある日、私はホストマザーに街の教会に連れて行ってもらった。入り口で握手をしては笑顔で信者を招き入れていた白人の青年。順番が回ってきて私がそっと手を差し出すと、それまで笑顔だった青年はひどく眉間にしわを寄せ、まるで不潔なもの扱いかのように私の手にちよっと触れたと思うと、すぐさま手を引っ込めハンカチでその手を大きくぬぐった。これが、16歳の私が生まれて初めて体験した人種

差別。純粹な100%の悪意に触れる経験は、あまりに衝撃的で、屈辱的で、脚が震えるほど悲しかった。

なぜ、ワタシが？ワタシがなにしたって言うの？

この体験が口火を切ったかのように、その後の私は続けざまに人種差別の洗礼を受けた。10ドル札を5ドル札と言い張ってお釣りを誤魔化したパスの運転手に「お前はどうせ英語がわからないだろ、諦める」と鼻先で笑われたし、私が先に注文したにも関わらず、他の客が温かな料理を食べ終わる頃に、ようやく冷めきった料理がぼんと出てきたこともあるし、ショッピングモールに買い物に行った時は、汚い言葉と共に生卵を投げつけられた。私は思った。「嫌われているんだ。ワタシが」と。そう、その頃の私は、私がどんな理由で差別されているのかを知らなかった。だからどうしようもなく、途方に暮れるしかなかった。

そんなある日、差別の答えを得る決定的な出来事が起きた。私が教室の前で授業の開始を待っていた時である。2人組のキウイがやってきて、はつきりとした声で私にこう言った。「ときなさいよ、邪魔なのよチャイニーズ」と。・・・え、ちょっと待ってよ。

「中国人なんかじゃない、私は日本人なの！」

私は反射的に、語気を強めてそう言い返していた。自分でもびっくりするぐらいの反発心が湧いた。するとキウイたちは途端に笑顔になり、「なあんだ、あんたジャパニーズなんだ。あたしねえ、日本好きよ。トヨタ、トヨタ！」と言ってはしゃぎ、両手でピースサインをして立ち去った。そう、つまりはこういう事だ。私がかれまで受けてきた差別は、もちろんすべてとは言えないまでも、恐らくそのほとんどの私が中国人と勘違いしたのがゆえのものだったのだ。この事実に行きついた後、私が素直に感じたのは残念ながら、安堵であった。嫌われていたのは私ではなかった。日本人ではなかった。ああ、良かった。

・・・良かった？

私はそこで気が付いた。黒髪で黄色人種で、一步海外に出れば私と言う人間の持つアイデンティティはアジア人でしかないという事に。それ以上でもそれ以下でもなく、私は会話という手段を奪われてしまえば、アジア人という情報以外なにも示せないちっぽけな存在だという事に。私は、国際社会におけるワタシは、単なるアジア人に過ぎないのだ。

はたしてこの自覚は、すぐさま虚しさに変わった。私は嫌われていない。でもワタシは嫌われている。世界から嫌われているんだ。日本人が良ければいいという

事ではない。中国人と思われるも、韓国人と思われるも、それでも現実を受け入れられるぐらい崇高なアジア人でなければいけない。

嫌われている場合じゃない！

理由のない差別はない。それ以降、これまで他人事だと思っていた中国人の海外でのあり方について、私は気にかけて見るようになった。そうしてみると、彼らの言動は街中でやたらと目につき、また最悪なことに鼻につくのだ。彼らに「住まう」という意識はない。彼らは海外に「巣食う」のだ。ニュージーランド最大の都市オークランドでは、今や2人に1人がアジア人である。各地には中国人街が出来上がり、排他的な市場を拡大させている。ただでさえ人数の多い中国人が集団行動をするのだから、どうしても嫌な面が引き立ってしまう。中国人の活躍は自国の発展であると言いきる彼らの異様なその愛国心に、恐れを感じざるを得ない。彼らにとつて、海外は飛躍のための踏み台ではない。そう、彼らには明らかに嫌われる原因があった。

差別は偶然生まれるものではなく、ある集団が自衛のために意図して生むものである。ニュージーランドの歴史上、先住民マオリ族と移住者イギリス人との対立は根深いものがある。そもそものが侵略のような形で誕生した国であるから、差別や被差別意識には敏感な国民性だ。

白人は長らくマオリ族たちを蔑んできた。肌の黒いマオリたちは、ずっと抑圧の歴史をたどってきた。そんな中グローバル化が進み、新たな標的を得たマオリたちは抑圧されるだけの生活を終えたのだ。差別と被差別のミルフィーユ。アジア人がそのなかでも下層に位置づけられている事実を、忘れてはならない。

さて、ここで当時の私は何をしたらかと、当然あなたは問うだろう。世界の現状を知り、どんなアクションを起こしたかと期待をするだろう。ニュージーランド人とアジア人のかけ橋となるべく、勉強会を主催した？内輪で固まって中国語ばかりを話すクラスメイトたちに割って入って、積極的に交流した？韓国人のおはあさんと歴史について議論した？・・・いいえ、私は何にもしなかった。まだ若く16歳の世間知らずは、自分の能力の可能性に至極否定的だった。また、もっと身近な問題として言語の壁や異文化の波にもまれてしまい、段々とそれどころではなくなっていた。私は「ワタシ」ではなく、「私」を優先する道へ向かっていつてしまった。せっかくながら気が付いたのに。せっかくながら芽生えた自意識だったのに。

帰国後の私は海外生活にすっかり憔悴していて、もう二度と留学なんかするもんかと心に決めていた。たった1年の間に、私の心はほぐれ、傷つき、嘆き、無力さを覚え、そして頑なに閉ざされていた。ニュージーランドで見聞きしたものをすべて、私はアウトプットすることなく自国に持ち帰ってきてしまった。

国内に持ち帰られた私の感情は鮮烈で、しっかりとした色を持っていて、ひとたび話し出せば周囲の人間はみんな真剣に聞き入ってくれた。私もいつしかそれで十分かもしれないと思うようになっていった。自分の成長があつて、土産話がたくさんあつて、女子高生の人生の一瞬としては、満足過ぎるぐらい意味ある年だったろうと。

でもこれは全部強がりだ。目に見える努力が出来ず、心の中で足踏みしかできなかった情けない自分への慰めでしかない。手の平に熱い後悔が残った。

大学は自由な場所だ。そして無責任なぐらい膨大な時間がある。人は長期的な手持無沙汰に見舞われた時、精神活動の高まりを覚える。こんな私も、留学時代への未練に胸を痛める機会が増えていった。最初は小さな波のようだったものが、どんどんと大きくなる。息苦しくらい、私は自分を国外に追放してやりたい衝動に駆られ始めた。

母親の一周忌を迎えた今年の梅雨、感情はついに爆発した。留学の際、「これは島流しよ」と笑つて言つた母の顔が思い出される。帰国して2年も経たないうちに、彼女は病気で他界した。親子で一緒に居られるはずだった月日を想えば想うほど、ニュージーランドでの時間を無駄という言葉で汚したくない意地は確固たるものになった。

海外に行かなくちゃ。そこに意味を創らなきゃ。ピースボートに乗りたい。少しでも多くの地域で、人種差別の芽を摘み取りたい。留学中、私はなんにも出来なかった。それが悔しくてしょうがない。伝えてないことはかりでやり残したことばかりで、そんな悲痛な記憶を引きずつたまま、私はもはや平凡に生きていく事はできない。私は知ってしまったのだから。世界の「ワタシ」の悲しい立ち位置を知ってしまったのだから。私には情報を発信する義務がある。キウイの女の子が私にかけたあのピースサインのような、手軽でちやちな平和に安心感を覚える、そんな寂しい人間で終わりにたくない。

私は恵まれていた。高校時代に得たせつかくの経験を無駄にしたくない。3年越しになつてしまったけれど、今度こそ世界に伝えたい。そして、世界を変えていきたい。私が「ワタシ」であることを、誰もが「ワタシ」であることに誇りを抱ける世界を、ちよつとでいい、この手で紡ぎたい。

「ワタシ」が私であるために